

一つの言語からもう一つの言語に訳される時に、どのように翻訳するかは学術的に探求されている内容である。しかも、このような言語理解の問題は、他国の学者には理解できない内容である。この小論は、一般的な日本語訳聖書におけるローマ書 3:23 の現行訳に不十分さを感じ、提言するものである。

1章 テキスト

1.1 ギリシア語テキストと私訳

πάντες γὰρ ἥμαρτον καὶ ὑστεροῦνται τῆς δόξης τοῦ θεοῦ
すべての者は罪を犯したので、神の栄光には達しない。

「ὑστεροῦνται」は、現在時称、中動態(または、受動態¹)、直接法、3 人称複数。主語は、「すべての者」(πάντες)であり、すべての者が罪を犯し、すべての者が「ὑστεροῦνται」である²。「新約聖書ギリシア語小辞典」³では、中動態で、「[奪格と]~に不足する、~を受けられないでいる」としている。しかし、パウアー⁴は受動態で、「欠けている」「足りない」としている。「罪を犯し、神の栄光から欠けた存在になった」⁵とも訳せる。ジェベット⁶は「ὑστερεῖν」は「相対的な用語で、誰かより劣っているために、失敗のために、何かに達さないために、ゴールに到達することに失敗したことに関連している。」と解説している。「神の栄光」(τῆς δόξης τοῦ θεοῦ)が、主語的属格(神が栄光としてくださる栄光)か、所属の属格か、議論の余地はある⁷。また、「神の栄光」が「ὑστεροῦνται」を修飾しているが、織田氏は「『奪格目的語』とよべるくらいのものである」⁸と指摘している。以上のことを踏まえて、私訳では「神の栄光には達しない」とした。

1 中動態と明言しているのは、Robertson, 織田、Black、永田。受動態と明言しているのは、Bauer、Moo、玉川、岩隈。しかし、Bauer も Moo も、「受けられない」という意味ではなく、属格を伴う受動態で「達しない」(come short of [something]) という意味だと言及している。

2 もっともケーゼマンは「接続詞は紛れもなく結果を表す意味を持っている」(ケーゼマン『ローマ人への手紙』岩本訳、187 頁)と言及している。岩波訳はそれで「そのゆえに」と付け加えたと考えられる。これは、「罪を犯した」(ἥμαρτον) がアオリスト時制形だからかもしれない。もっともポーターは、アオリスト時制形は過去の行動と同一視することは間違っていると主張し、この箇所も「いつでも(全時間的)起こる行動に関するアオリスト時制(格言アオリスト)」として分類している。(ポーター著、伊藤訳、20-21 頁)ポーターの主張が正しくても、「罪を犯した」結果として「ὑστεροῦνται」であるということは、文脈的には否定できないと思われる。

3 織田昭編『新約聖書ギリシア語小辞典』、教文館、2006 年。

4 “pass. lack, be lacking, go without, come short of w. gen. of the thing.” BAG, 2nd ed..玉川直重は、受動態で、『貧する、窮乏する』としている。(『新約聖書ギリシア語辞典』、キリスト新聞社、2000 年、939 頁。)

5 ダンは、パウロの理解はアダムが墮落により、神の栄光を失ったことと関連していると考えている。しかし、別の可能性も否定していない。”So Paul probably refers here both to the glory lost in man’s fall and to the glory that fallen man is failing to reach in consequence.”(Dunn, James D.G.. “Romans 1-8.” *Word Biblical Commentary 38A*. Nashville:Thomas Nelson, 1988, p.168.)

6 Jewett, Robert. “Romans.” *Hermeneia*. Augsburg: Fortress Press, 2007, p.280.

7 「すべての者」が動作の主体と理解しているが、更なる考察が必要である。本論が曖昧になるので、今後の課題としたい。

8 織田昭『新約聖書のギリシア語文法Ⅲ』、教友社、2003 年、729 頁。織田氏はこの箇所を、「下位・劣等を意味する動詞『劣る』『引けを取る』『達しない』等と用いて「動詞を修飾する分離・源泉・比較の奪格」に分類。モール(Moule)も Genitive of Separation の項で「ὑστερεῖσθαι」(to fall short of)の動詞の後に奪格の概念が表現されていると指摘している。Moule, An idiom-book of New Testament Greek., p.41.

1.2 日本語テキスト⁹

新共同訳「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、」

口語訳「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、」

新改訳「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」

岩波訳「すべての者が罪を犯したからであり、〔そのゆえに〕神の栄光〔を受けるの〕に不十分だからである。」

2章 問題点

この日本語訳の問題点として考えたいのは、一般的に使用されている日本語訳聖書に、共通して「受けられない」という日本語を用いているということである。この箇所における「神の栄光」が何を意味するかは、釈義の問題として世界的に論じられる内容だが、日本語訳における「受けられる」「受けられない」ということばは、世界的に論じることができない内容である¹⁰。一般的に「受けられる」という意図で用いられる「λαμβάνω」(ローマ 5:17, 8:15¹¹)も用いられておらず、岩波訳が示すように、これは「付け足し」の言葉である。他言語に翻訳するために、多少の「付け足し」¹²が必要なことは理解できる。しかし、付け足された言葉がテキストに影響を与えるような部分に関して、学術的に論じられてきていないというのはいかかなものだろうか。以下の先行研究は、数少ない日本人聖書学者の言及の一部である。

3章 先行研究

高橋敬基氏は「個々人が罪を犯し、その結果起こったことは、《神の栄光》に『届かなくなった』ということである。¹³」と言及している。これは新共同訳の注解書ではあるが、新共同訳がどうして「受けられなくなっている」と訳したかに関する言及はない。高橋氏の主張を考えると、どうして、新共同訳で「届かなくなった」と訳さなかったのか疑問が残る。

宮平望氏は、「この節の『及ばない(ヒュステレオー)』という表現は、7 節の『満ちあふれる(ペリセウオー)』の対義語である」と言及している。しかし、「この節は、本来人は神の像に造られて神の栄光を受けるはずだったことを示唆している。」¹⁴と受動態として理解しているような印象を受ける言及もしていて整合性がないように感じる。

9 下線著者

¹⁰ インマヌエル総合伝道団が発行した『ウェスレアン聖書注解』(新教出版社、1985年)のローマ書の注解は、ウィルバー・T・デイトンが原著者で、309頁に次のような言及がある。「すべての人は神の栄誉(あるいは顕現)を受けることができない(あるいは欠けている)。それは人間の絶望的な失敗である。救いは、外側からだけ与えられるものである。それは、イエス・キリストの中に、また彼が備えたもう義の中に見出されるのである。」(河村襄訳)「受けることができない」と訳しながら、(あるいは欠けている)と補完されているのは、デイトン氏がこのポイントを原著で論じてはいないからであろう。この訳の問題は、ブルース、『ティンデル聖書注解ローマ人への手紙』岡山訳、いのちのことば社、2008年にも見られる。「受けることができず」という日本語訳(新改訳)を引用したがゆえに、ブルースのポイントが分かりづらい。ブルースの見解は、罪によって神の栄光を分かち合うことを含んだ「神のかたち」(the image of God)が、罪によって失われたことであるが、「受けることができず」の解説とは考えがたい。ヴィルケンスは、「罪人は、アダムの創造において所有しかつ失ったように、神の栄光を失う。」(『EKK 新約聖書注解IV/1 ローマ人への手紙』岩本修一訳、教文館、1984年、254頁)と言及し、モーセの黙示録20と比較するように言う。「わたしは以前身にまわっていた栄光を失いました(栄光から遠ざかりました)」。ヴィルケンスの指摘は、「受けられない」という問題ではなく、「神の栄光」が何を意味するかということである。この見解はケーゼマン(前掲書188頁)と同じ。

¹¹ 「栄光を受ける」という表現はパウロ書簡ではないが、ヨハネ5:41,44にでてくる。しかし、これらも「λαμβάνω」が用いられている。

¹² 新共同訳は特に動的等価翻訳理論(Dynamic equivalence)の影響があり、敷衍している部分は確かにあるが、翻訳理論の問題をここで指摘したいわけではない。

¹³ 高橋敬基『新共同訳 新約聖書注解II ローマの信徒への手紙』、日本基督教団出版局、1991年、26頁。

¹⁴ 宮平望『ローマ人への手紙、私訳と解説』、新教出版社、2011年、64,65頁。宮平氏は、ダン(Dunn, WBC,

木下順治氏は「神の栄光を受ける資格は(だれにも)ないからです」¹⁵と訳しているが、その根拠の提示はしていない。しかし、この著書の中で頻繁に「上からの下への線」(神が人に与える)という表現が用いられている。しかし、受けることができない人間は、「上からの下への線」でさえも存在しえないとは言えないだろうか。

川島重成氏は『ソロモンの知恵』(新共同訳では『知恵の書』)との関連を指摘し、次のように言及している。

人は皆墮罪によって本来身につけていた神の栄光(似像性)を喪失してしまった。パウロはこのように人間の悲惨の特徴をイスラエル・ユダヤ教の伝統に従って示し、それとのコントラストにおいてイエス・キリストにある終末論的約束を語っているのである。パウロはキリストの支配下に入る人間に、義と共に失われた神の似像性(栄光)が再び与えられる、再創造されると考えているのであろう。¹⁶

神が「再び与えられる」というのに、人は「受けられない」というのは、問題がないのであろうか。

泉田昭氏は次のように述べている。

〈神からの栄誉を受けることができず〉は「神の栄光に達しない」と訳すこともできる。神の栄光にふさわしくなくなっている、ということである。それは、神の栄光が受けられなくなるという将来の約束に関わるのではなく、神の栄光にふさわしくないという現在の状態に言及していることばである。¹⁷

泉田氏は「受けられなくなる」という意味ではないと言及している。しかし、翻訳の問題に踏み込むことはしていないので、疑問が残る。

田川建三氏は『神の栄光に欠けるのである』と訳し、明確に以下のように解説している。「口語訳(=新共同訳)は『神の栄光を受けられなくなっており』と訳している。ここも『受ける』は無用のつけ足し。¹⁸」

「受ける」という言葉が、田川氏が言うように「無用のつけ足し」であるのならば、この翻訳はもう少し検討されてもいいものではないのだろうか。「受ける」という認識を明確にしている日本人研究者はいないと思われる。

4章 考察

そもそも、英訳の聖書には「受けられない」(can not receive)という訳は存在していない¹⁹。日本語訳の「受ける」という言葉が付け足された理由は、「ὑστεροῦνται」を受動態として理解しているからだと推測される。実際、『ギリシア語新約聖書釈義事典』は受動態とみなし、「『欠如をこうむる』を意味する受動は、とりわけパウロに見られる。』²⁰と受

Vol38A, p.167)を参照箇所として挙げている。しかしダンは、「神の栄光が受けられない」という視点ではなく、人間の墮落(man's fall)によって栄光を失ったことと、墮落した人間(fallen man)はその結果、神の栄光に及ばないということの両方をパウロは意図したと考えている。(So Paul probably refers here both to the glory lost in man's fall and to the glory that fallen man is failing to reach in consequence.)(ダン、前掲書、168頁。)

¹⁵ 木下順治『新解・ローマ人への手紙』、聖文舎、1983年、36頁。

¹⁶ 川島重成『ロマ書講義』、教文館、2010年、114頁。ソロモンの知恵の引用箇所は2:23-24「神は人間を不滅な者として想像し、ご自身の本性の似姿として造られた。悪魔のねたみによって死がこの世に入り、悪魔の仲間に属する者が死を味わうのである。」

¹⁷ 泉田昭「ローマ人への手紙」、『新聖書注解』新約2、いのちのことば社、1993年、206-207頁。

¹⁸ 田川建三訳『新約聖書 訳と註4』、作品社、2009年、142頁。

¹⁹ Wilckens(Wilckens, *Theological Dictionary of the New Testament vol. VIII*, Kittel ed. Translated by Bromiley. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1972, pp.592-601)による WORD Study にも見られない。

²⁰ 『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅲ』、教文館、1995年、456頁。

動的な解釈を提案する。もっとも、A. T. ロバートソン²¹をはじめ、多くの学者は中動態と主張している。仮にパウロが受動態として用いているとして、『ギリシア語新約聖書釈義事典』が主張するように「υστεροῦνται」を受動態としてパウロが用いていると考えることが可能なのは、この他、コリント第一 1:7、8:8、12:24、コリント第二 11:9、フィリピ 4:12 である²²。ここでは、これらの箇所を比較することを通して、この「受ける」ということばの付け足しの必要性を考えたい。

4. 1 コリント第一 1:7

ギリシア語テキスト ὥστε ὑμᾶς μὴ υστερεῖσθαι ἐν μηδενὶ χαρίσματι ἀπεκδεχομένους τὴν ἀποκάλυψιν τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ□

新共同訳 その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。

口語訳 こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。

新改訳 その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。

岩波訳 かくしてあなたがたは、いかなる賜物においても欠けることなく、私たちの主イエス・キリストの出現を待ち望んでいる。

4. 2 コリント第一 8:8

ギリシア語テキスト βρῶμα δὲ ἡμᾶς οὐ παραστήσει τῷ θεῷ□ οὔτε ἐὰν μὴ φάγωμεν υστερούμεθα, οὔτε ἐὰν φάγωμεν περισσεύομεν.

新共同訳 わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。

口語訳 食物は、わたしたちを神に導くものではない。食べなくても損はないし、食べても益にはならない。

新改訳 しかし、私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。

岩波訳 「しかし、食物がわれわれを神へと導くことはない。もしもわれわれが[それを]食べないとしても、われわれは何も損失を蒙るわけではないし、もしも[それを]食べたとしても、われわれは何か優れた者になるわけでもない。」

²¹ "And fall short (καὶ υστεροῦνται). Present middle indicative of υστερεω, to be υστερο (comparative) too late, continued action, still fall short. It is followed by the ablative case as here, the case of separation." (Robertson, A.T. *The Robertson's Word Pictures of the New Testament*. <http://www.biblestudytools.com/commentaries/robertsons-word-pictures/romans/romans-3-23.html> 2012年1月28日) ブラックは中動態がもっている特別な意味は、「人間はかつて所有した神的な栄光を失っただけでなく、その喪失を自ら知っているのである。」(ブラック「ローマの信徒への手紙」『ニューセンチュリー聖書注解』太田訳、日本キリスト教団出版局、2004年、100頁。)と指摘している。

²² Dunn は、この他、2Cor 11:5; 12:11 を挙げている。(Dunn. "Romans 1-8." *WBC 38A.*, p.167.) しかし、これらの箇所は明らかに能動態であり、両方ともパウロが『大使徒』(ὕπερλίαν ἀποστόλων.) と呼ぶ人物と比較をし、その人物に自分は「劣らない」、「引けはとらない」という意味で用いていて、ここでは考察の対象から外した。また以下の引用箇所の下線著者。

4.3 コリント第一 12:24

ギリシア語テキスト τὰ δὲ εὐσχήμονα ἡμῶν οὐ χρεῖαν ἔχει. ἀλλὰ ὁ θεὸς συνεκέρασεν τὸ σῶμα τῷ ὑστερουμένῳ περισσοτέραν δούς τιμὴν,

新共同訳 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。

口語訳 美しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。

新改訳 かつこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。

岩波訳 しかし、私たちのうちのよい恰好のところは、その必要がない。しかし神は、より劣っているところに対しより多くの誉れを与えながら、からだを結び合わされたのである。

4.4 コリント第二 11:9

ギリシア語テキスト καὶ παρῶν πρὸς ὑμᾶς καὶ ὑστερηθεὶς οὐ κατενάρκησα οὐθηνός□ τὸ γὰρ ὑστέρημά_μου προσανεπλήρωσαν οἱ ἀδελφοὶ ἐλθόντες ἀπὸ Μακεδονίας, καὶ ἐν παντὶ ἀβαρῆ ἑμαυτὸν ὑμῖν ἐτήρησα καὶ τηρήσω.

新共同訳 あなたがたのもとで生活に不自由したとき、だれにも負担をかけませんでした。マケドニア州から来た兄弟たちが、わたしの必要を満たしてくれたからです。そして、わたしは何事においてもあなたがたに負担をかけないようにしてきたし、これからもそうするつもりです。

口語訳 あなたがたの所において貧乏をした時にも、だれにも負担をかけたことはなかった。わたしの欠乏は、マケドニヤからきた兄弟たちが、補ってくれた。こうして、わたしはすべての事につき、あなたがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後も努めよう。

新改訳 あなたがたのところにおいて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたのです。私は、万事につけあなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。

岩波訳 そしてあなたがたのところ^にいた時には、窮乏した時でも、誰にも重荷を負わせることはしなかった。なぜならば、マケドニア[州]からやって来た兄弟たちが、私の窮乏を補充してくれたからである。そして私は、すべてにおいて私自身[のこの身]があなたがたにとって重荷とならないようにしてきたし、[今後も]それを守っていくであろう。

4.5 フィリピ 4:12

ギリシア語テキスト οἶδα καὶ ταπεινοῦσθαι, οἶδα καὶ περισσεύειν□ ἐν παντὶ καὶ ἐν πᾶσιν μεμύημαι, καὶ χορτάζεσθαι καὶ πεινᾶν καὶ περισσεύειν καὶ ὑστερεῖσθαι□

新共同訳 貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。

口語訳 わたしは貧に処する道を知っており、富における道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。

新改訳 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。

岩波訳 私は卑賤に下ることをも知っているし、満ち溢れることも知っている。私はすべての点、すべての面において精通して来ている。満腹することも、飢えることも、満ち溢れることも、窮乏することも。

4.6 まとめ

コリント第一、第二のテキストにおいてもフィリピのテキストにおいても、たとえ受動態と考えたとしても、「受ける」という言葉の付け足しはしていないし、その必要性も感じられない。これらの箇所を比較して分かることは、「ὕστερόμαι」の根本的な意味が「欠け、不足」であるということである。「受けられない」という意味でパウロが用いたと考える根拠はない。ダグラス・ムー²³は受動態として理解してはいるが、その意味は「欠け」であり、属格を伴い「達しない」という意味だと指摘している。ヴィルケンスは「ὕστερόμαι」の語彙研究で、この単語が新約聖書において、七十人訳と同じように、能動態でも中動態でも違いなく用いている²⁴と指摘しているように、「受けられない」という意味があるとは考え難い。いずれにせよ、田川氏の言うように、「受ける」は無用のつけ足しと言えるのではないだろうか²⁵。

5章 まとめ

以上のことから、現在の翻訳に疑問が湧く。

とるに足りない指摘かもしれないが、「受けられない」と言葉を付け足すならば、神が主体的に行動しても、人は受けることが出来ないという印象を受ける。これは、多くの伝統的な解釈を考察することに対しての妨げにもなる。例えば、ルター²⁶の提唱する「義認の教理」を理解することが難しくなる。マクグラスは、ルターの提唱する「義認の教理」を、次のように説明している。「ルターによる現状打破はそれと対照的に神が義認に必要なすべてのものを提供し、罪人がなす必要があるものはそれを受けるとしてという認識を出発点とする。²⁷」主に用いられている日本語訳のテキストから考察するとき、このルターの「義認の教理」の解釈はそもそも矛盾を感じる。罪人がなす必要があるものはそれを「受けること」と言うのだが、このローマ 3:23 の現在の翻訳は、罪人は「受けることはできない」と断言するのである。したがって、「義認の教理」の解釈の出発点時点が矛盾している。そもそも神から人は何も「受けられない」ならば、神が主体的に与えようとする恩恵が受けられないというならば、「義認の教理」の解釈そのものが成り立った理由が分からなくなる。「義認の教理」に関しては、近年、パウロ研究において議論されているが、もし、そもそも人が神から何も「受けられない」存在であるならば、「神の恩恵」という概念そのものが崩れてしまい、議論そのものも成り立たなくなる。しかし、このような発想の問題は、日本語においてのみ起こりうることであり、他国語では理解できない。

このような日本語訳の「付け足し」の問題が、今後議論されていく場が作られていくことを期待したいと思う。

²³ Moo, Douglas, "The Epistle to the Romans." *The New International Commentary of the New Testament*. Grand Rapids: Wm.B. Eerdmans Publishing Company, 1996, p.226, n.33. "The verb Paul uses here, , means, in the passive, 'to lack' or, with a following genitive, as here, 'come short of {something}' (BAGD)."

²⁴ In the NT, as in LXX, the act. ὑστερέω and deponent ὑστερόμαι are used without distinction. (Wilckens, *Theological Dictionary of the New Testament vol. VIII*, Kittel ed. Translated by Bromiley. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1972, p.596.)

²⁵ 織田昭氏は、『ローマ書の福音 (旧版)』 (<http://erinika.life.coocan.jp/data061/ROM-09.pdf> 2012年1月28日。)の中で、こう言っている。「ὕστεροῦνται は、神の栄光を『現す力を欠く』意味にも、『受けるに足りない』意味にも、『反映するには余りにもお粗末』の意味にも、訳すことができる。」もちろん、「神の栄光」との関係性をどう理解するかで、日本語表現としては「受けるに足りない」という意味が可能であるということでは理解できる。しかし、「足りない」という意味を補うために「受けるに」という言葉を付け足すことは正当化されるだろうか。

²⁶ ルターは、スコリエで、「彼らは神の栄光を欠いている」として、次のように説明している。「『欠いている』とは、なにかを奪われていることと取られるべきであって、彼らは空虚であるとか、空っぽであるということになる。つまり、この意味は、彼らは、神のまえで誇ることができるような義をもたない、ということである。」(『ルター著作集 第二集 第8巻』、聖文舎、1992年、372頁。)と言及している。ルターの意識には、「受けられない」という発想はない。

²⁷ A.E.マクグラス『宗教改革の思想』高柳俊一訳、教文館、2000年、150頁。下線著者

参考文献

日本語文献

- A.E.マクグラス『宗教改革の思想』高柳俊一訳、教文館、2000年。
- E. ケーゼマン『ローマ人への手紙』岩本修一訳、日本キリスト教団出版局、1981年(1980年)。
- F.F.ブルース『ティンデル聖書注解ローマ人への手紙』岡山英雄訳、いのちのことば社、2008年。
- 泉田昭「ローマ人への手紙」、『新聖書注解』新約2、いのちのことば社、1993年。
- 岩隈直訳注、新約聖書Ⅷ、山本書店、1990年(1973年)。
- ウルリッヒ・ヴィルケンス『EKK 新約聖書註解Ⅳ/1 ローマ人への手紙』岩本修一訳、教文館、1984年。
- ウィルバー・T・デイトン『ウェスレアン聖書注解』河村襄訳、新教出版社、1985年。
- 織田昭『ローマ書の福音(旧版)』(<http://erinika.life.coocan.jp/data061/ROM-09.pdf> 2012年1月28日)。
- 織田昭『新約聖書のギリシア語文法Ⅲ』、教友社、2003年。
- 織田昭編、『新約聖書ギリシア語小辞典』、教文館、2006年。
- 川島重成『ロマ書講義』、教文館、2010年。
- 木下順治『新解・ローマ人への手紙』、聖文舎、1983年。
- 『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅲ』、教文館、1995年。
- スタンリー・E・ポーター『ギリシャ語新約聖書の語法』伊藤明生訳、ナザレ企画、1998年。
- 高橋敬基『新共同訳 新約聖書注解Ⅱ ローマの信徒への手紙』、日本基督教団出版局、1991年。
- 田川建三訳『新約聖書 訳と註4』、作品社、2009年。
- 玉川直重『新約聖書ギリシア語辞典』、キリスト新聞社、2000年。
- 永田竹司監修、川端由喜男編訳、『ギリシア語新約聖書』、教文館、2001年。
- マシュー・ブラック「ローマの信徒への手紙」『ニューセンチュリー聖書注解』太田修司訳、日本キリスト教団出版局、2004年。
- 宮平望『ローマ人への手紙、私訳と解説』、新教出版社、2011年。
- 『ルター著作集 第二集 第8巻』、聖文舎、1992年、372頁。

英語文献

- Dunn, James D.G.. “Romans 1–8.” *Word Biblical Commentary 38A*. Nashville: Thomas Nelson, 1988.
- Moo, Douglas, “The Epistle to the Romans.” *The New International Commentary of the New Testament*. Grand Rapids: Wm.B. Eerdmans Publishing Company, 1996.
- Moule, C.F.D. *An Idiom-Book of New Testament Greek*. Cambridge: Cambridge University Press, 1959.
- Robertson, A.T. *The Robertson's Word Pictures of the New Testament*.
<http://www.biblestudytools.com/commentaries/robertsons-word-pictures/romans/romans-3-23.html>
2012年1月28日
- Wilckens, *Theological Dictionary of the New Testament vol. VIII*, Kittel ed. Translated by Bromiley. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1972
- W. Bauer, W.F. Arndt, F.W. Gingrich, and F.W. Danker, *Greek-English Lexicon of the NT and Other Early Christian Literature*. Chicago: The University of Chicago Press, 1979.